

九世紀武蔵国における造瓦体制 — 模骨文字瓦の生産とその背景 —

宮原 正樹

はじめに

九世紀の武蔵国における造瓦体制については、『続日本後紀』承和十二年（八四五）三月己巳条の武蔵国分寺七重塔再建の出願・許可を根拠とした東金子窯跡群八坂前窯跡及び新久窯跡の造瓦体制を中心に述べられ、塔再建期として一括りに考えられているのが現状である。しかしながら、九世紀には、七重塔再建以外にも、弘仁九年（八一八）や元慶二年（八七八）の地震など、国分寺をはじめ、武蔵国各郡の寺院においても補修を想定させる事象が歴史書には記されている。こうした記事に偏って、瓦生産の開始を考えるのは尚早かもしれないが、これまで蓄積されてきた資料と近年の発掘調査に伴う新資料を含めて、九世紀の造瓦体制については、再検討が必要である。

本稿で取り上げる模骨文字瓦は、瓦製作時に使用する成形台に文字を彫り込み、その文字が瓦の凹面に陽銘文字として印す瓦である。武蔵国における模骨文字瓦の初現は、武蔵国分寺創建期の瓦生産窯跡とされる多摩ニュータウンNo五二三遺跡である。凹面に多摩郡を示すと考えられる「多」陰銘文字を印す丸瓦と平瓦が出土している。し

かし、No五—三での模骨文字瓦の生産は、造瓦の中心地が南比企窯跡群へ移行し、生産体制の整備に伴って押印を用いた郡名表記に統一されたためか、行われなくなる。

模骨文字瓦の供給先である武蔵国分寺跡からは、一〇種以上の出土例があり、(さらに、国分寺に限らず武蔵国内の寺院への供給も認められ)一定量の供給があったと想定される。また、東金子窯跡群や南多摩窯跡群、桜沢窯跡、新開窯跡など九世紀から一〇世紀の窯跡において生産されていることから、九世紀の造瓦体制を示す要素となりそうである。そこで本稿では、武蔵国内の模骨文字瓦を、整理し、九世紀の瓦生産体制の一端を考えてみたい。

一 模骨文字瓦出土資料

武蔵国内の寺院跡において、模骨文字瓦の出土が確認できる寺院跡は、武蔵国分寺跡、入間郡勝呂廃寺、高麗郡女影廃寺、三ヶ寺である(第1図)。武蔵国分寺を除いた二寺は、郡内における中心的な寺院であったと考えられている。

武蔵国分寺は、Ⅰ期(創建期、八世紀後半)、Ⅱ期(整備・拡充期、九世紀後半)、Ⅲ期(衰退期、一〇—十一世紀)に区分されている(有吉・中道二〇—二三)。Ⅱ期の整備・拡充期においては、七重塔再建と講堂拡張を含めた伽藍大改修など、創建期に次ぐ、瓦の需要と生産拡大が図られたと考えられる。

これまでの調査で、大別二七種の模骨文字が確認されている。さらに文字毎に数種に分類でき、これらを含めれば五〇近くになる。細分数は、「上」七種、「大」四種の順に多い。特殊な模骨文字としては、二文字の逆字「造塔」である(第2図)。新たに確認された塔跡周辺で出土数が多いとされる(中道二〇—二二)。「造路」という行為

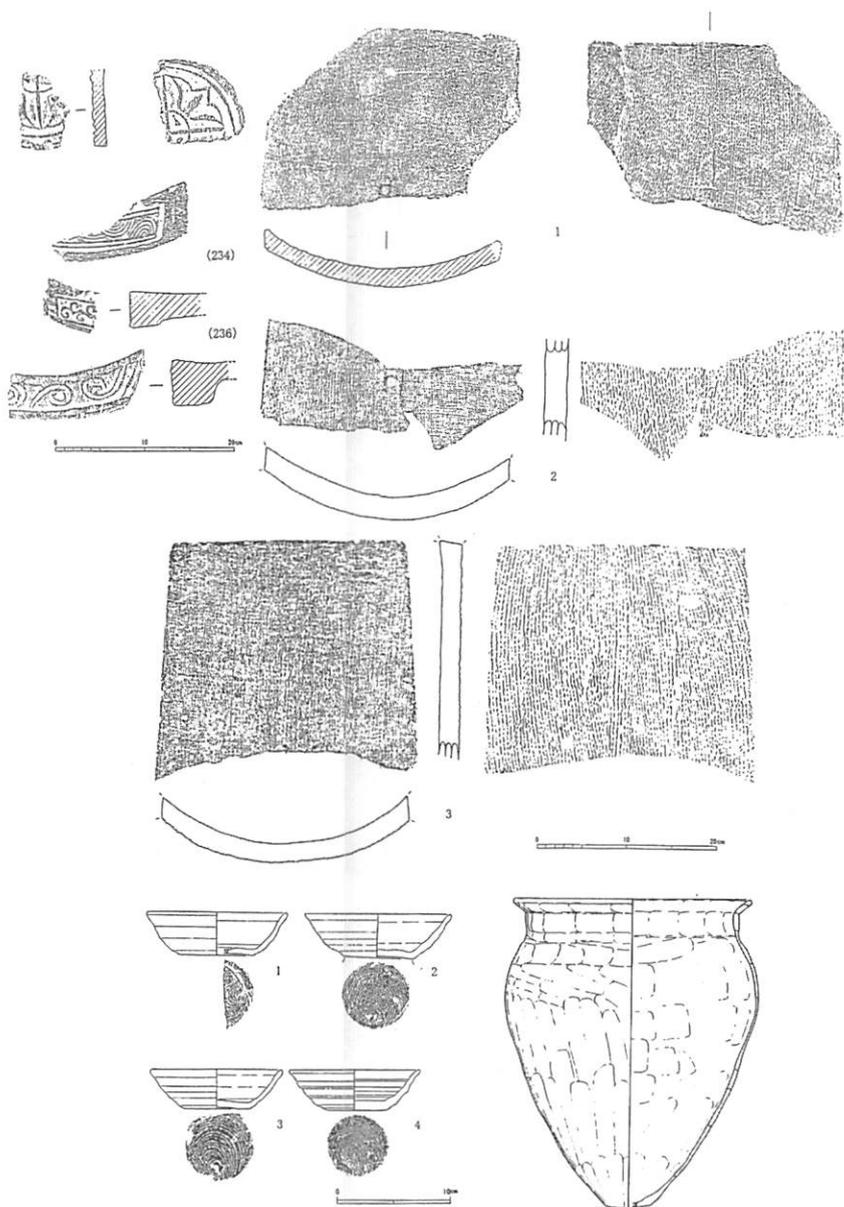
を表す文字は他にはなく、文字の如く、「塔を造る」ための瓦か「造塔」に関係した機関を示す瓦であろう。

瓦の様相についてみると凸面調整の叩きは、多摩ニュータウン No. 五二三遺跡で出土する「多」瓦の格子叩きを除けば、いずれも縄叩きである。つくりは、その殆どに糸切り痕が無いことや、破損状況やひびが横方向であることから、粘土横紐一枚作りである。また、「中」の模骨文字がヘラ描き文字瓦に伴う例もみられる(第2図)。この半円波状文の字瓦は、国分寺二三四型式字瓦を模倣したものであろう。

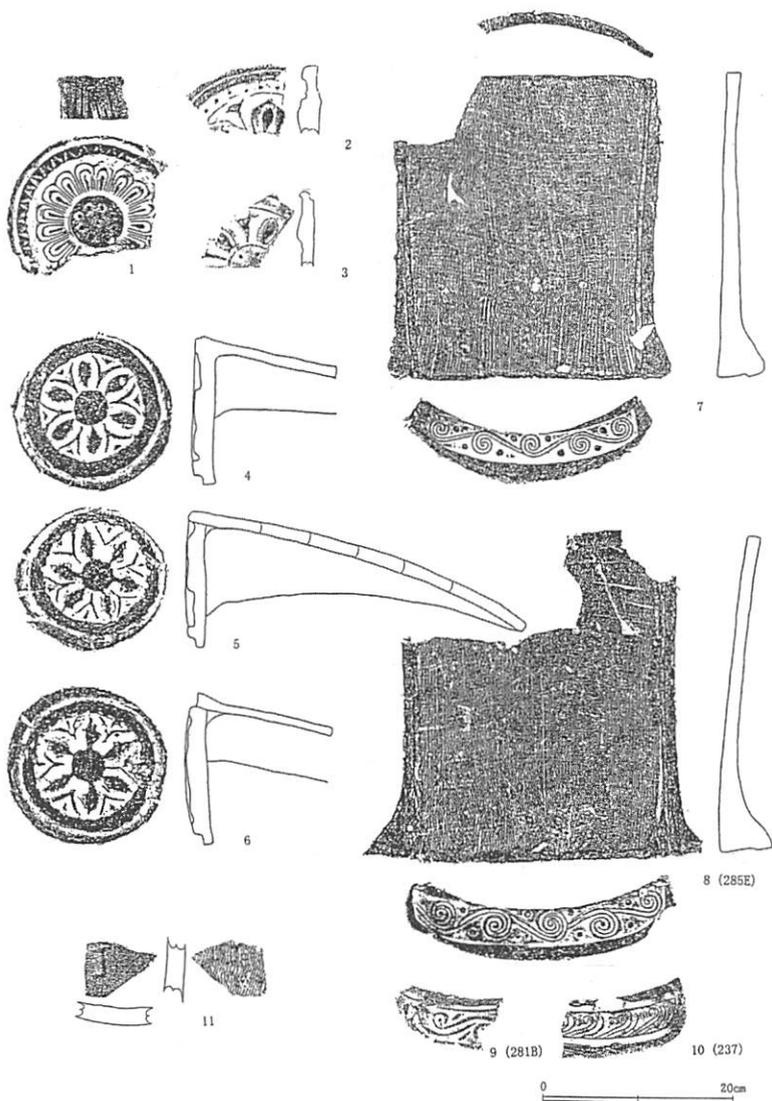
勝呂廃寺は、埼玉県坂戸市の越辺川右岸台地上に所在する七世紀末を創建とする古代人間郡に属する寺院跡である。

寺院施設に関する遺構は、一九八〇年代の発掘調査で、基壇状遺構三基、掘立柱建物跡三棟、区画溝、道路跡が確認されている(田中他一九八一など)。出土遺物の中に相輪の破片も出土しており、塔を配置する本格的な寺院であったと考えられる。寺院の変遷については、出土瓦の分析から、七世紀末に上植木廃寺系文様を用いて創建され、複弁蓮華文を採用する八世紀前半と国分寺創建期に画期を迎えるとされる(昼間二〇〇九)。

模骨文字は、「𠄎」¹⁾、逆字「廣」²⁾、逆字「上」³⁾、「大」⁴⁾の四種である(第3図)。いずれも凸面縄目叩きの粘土横紐一枚作りで、側部調整は一度のナデのみである。厚さ約二センチを測り、勝呂廃寺の創建期瓦に近い薄さである。須恵質だが、灰褐色で焼成はややあまい。逆字「上」と「大」は、F地区四号竪穴建物跡のカマドの構築材として使用されている。同じカマド内の須恵器坏法量と土師器甕の年代から、九世紀後半に寺院へと供給され、その後カマドの構築材に転用されたと考えられる。また、勝呂廃寺からは新久竪跡で生産される国分寺二三四C型式字瓦が出土しており、少なくとも九世紀後半には補修が行われたといえよう。勝呂廃寺は、この頃まで寺院として存続が確認でき、衰退を迎えるのは、武蔵国分寺七重塔再建以降であると考える。



第3図 勝呂廃寺出土瓦および土器



第4图 女影麁寺出土瓦

女影廃寺（若宮遺跡）は、埼玉県日高市の小畔川と下小畔川によって形成された台地上に位置する。当該地域は、靈亀二年（七二六）に、七ヶ国の「高麗人」一七九九人を集めて置郡した古代高麗郡の中心地である。発掘調査では、寺院施設とみられる遺構は見つかつておらず、規模や性格は不明である。ただし、三次調査溝跡及び土壙から軒先瓦など大量の瓦が出土していることから寺院の存在は肯定できる。

軒先瓦は、鍔瓦三種、宇瓦二種が確認されている（第4図）。鍔瓦は、周縁に珠文を廻らせる単弁六葉蓮華文とこの軒丸瓦を祖形とすると考えられる単弁六葉蓮華文である。後者は、前後関係は不明だが、蓮弁の形が丸みを帯びるタイプの範も存在している。瓦当面と男瓦の径が合わず、男瓦がはみ出しているため周縁を二重に形成している。さらに、瓦当裏面や男瓦部にロクロ状の回転台で調整した痕跡がみられることから、特異な造瓦技術をもつ工人が製作に携わっていたと推察される。二種を比較すると、珠文縁単弁六葉蓮華文は表現も繊細であることから、こちらが先行すると考える。宇瓦は、唐草が左行し、その第一単位が逆巻の形をとる偏向唐草文と、右行の偏向唐草文が出土し、武蔵国分寺跡でも同系の宇瓦が報告されている。范に対して瓦当面が広く、脇区および外区に素文部分大きく残る。この特徴は、南比企窯跡群の新沼窯跡、天沼窯跡で生産される平城宮系均整唐草文字瓦からみられるようになり、九世紀代とされる宇瓦の殆どに確認できる。

八世紀後葉から九世紀に寺院の整備が進むと考えられる女影廃寺においても、「丁」の模骨文字が平瓦に確認できる。「丁」については国分寺での例がないが、「上」が転化した可能性がある。小破片のため瓦の作りは不明だが、凸面は縄目叩き調整が施される。厚さは、一・八センチと二センチに満たない。女影廃寺の瓦類は、厚さが二センチ前後と薄い傾向がある。

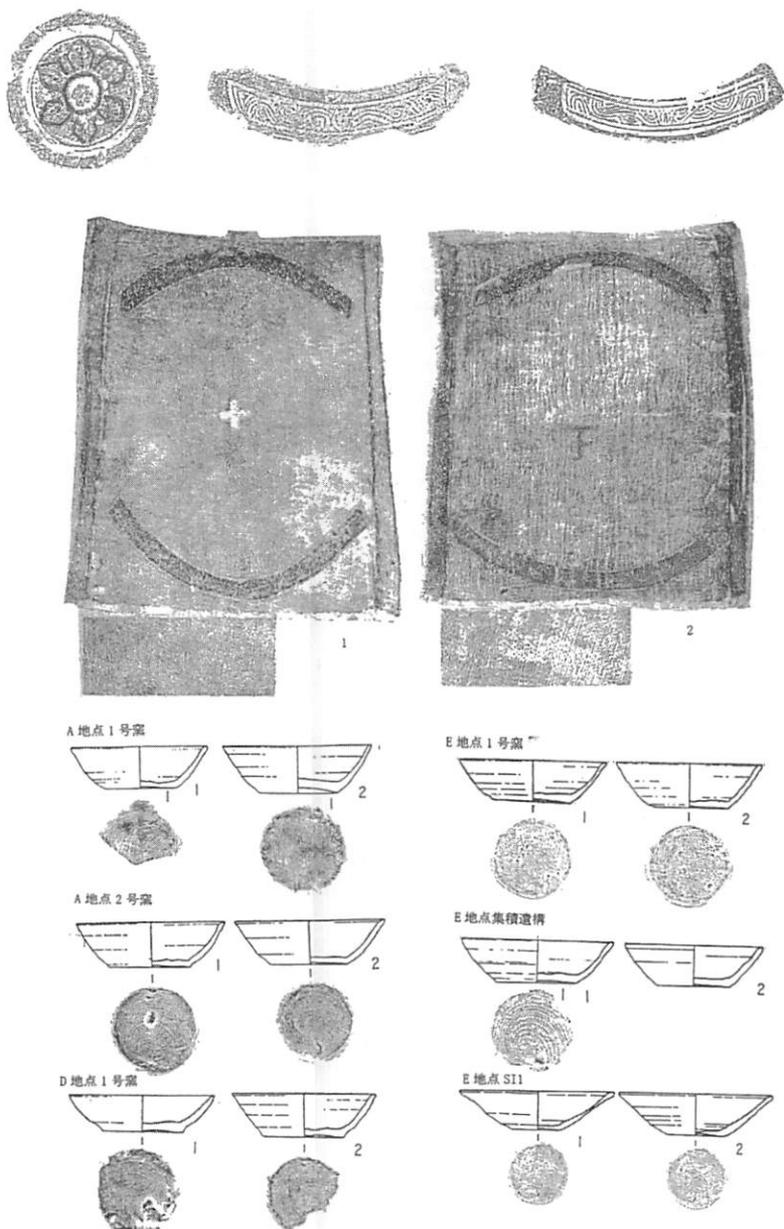
以上、武蔵国内の寺院から出土した模骨文字瓦を概観した。その結果、模骨文字瓦と供出する軒先瓦の文様や瓦

の製作技法は、南比企窯跡群や南多摩窯跡群に生産の中心があつた国分寺創建期の瓦とは、異なる特徴を持つことがわかつた。製作技法に限ってみれば、粘土横紐作りは、国分寺創建以前の七世紀後葉から八世紀前半代における南比企窯跡群で見られる技術であり、先代の瓦製作の本流を外れた技法で模骨文字瓦を生産していたことが想定できる。つまり、模骨文字が流通する頃には、造瓦従事する工人の性格が変質していたといえよう。その変質の背景には、国分寺造営完了に伴う瓦の需要減少が関係していると考えるが、そのような状況下にあつても、九世紀の造瓦は武蔵国内各窯で継続されていたのである。

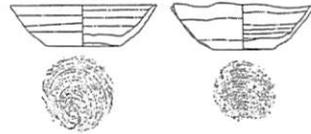
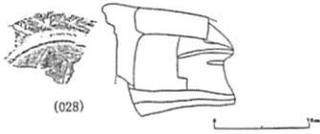
二 模骨文字瓦生産窯跡とその時期

前章でみたように、模骨文字瓦は、武蔵国各地の寺院へ一定量供給されていたことがわかる。その供給の要因は、創建時と比べ規模に変化はあれ、寺院施設が整備されていたであろうことから、補修と考えられる。したがって、武蔵国分寺と各寺院で模骨文字が共通することや、七重塔再建期の九世紀後半以降に瓦を生産する窯跡が増加することなどから、当該期にいくつかの画期を設定できそうである。そこで、模骨文字瓦の生産が確認できる窯跡の資料をもとに、その時期を検討してみたい。

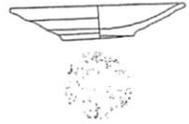
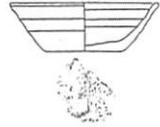
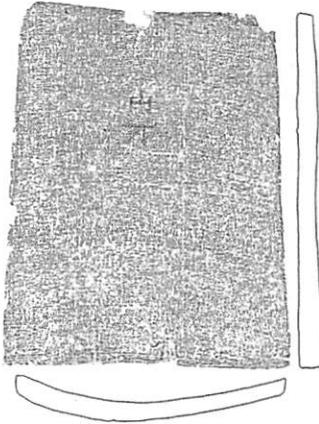
新久窯跡は、八坂前窯跡とともに、「続日本後紀」承和十二年（八四五）にみえる武蔵国分寺七重塔再建許可に際して瓦生産を開始したとされる窯跡である。両窯跡と周辺に展開する窯跡を含めて東金子窯跡群と呼ばれ、須恵器生産は八世紀中葉に開窯し、前内出窯など良質の須恵器生産をおこなう。新久窯跡でも、七重塔再建に伴う瓦生産終了後、須恵器生産を拡大させる（坂詰一九八四）。新久窯跡からは、四基の窯跡と瓦集積遺構、竪穴建物跡一



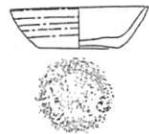
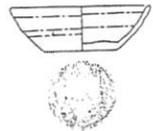
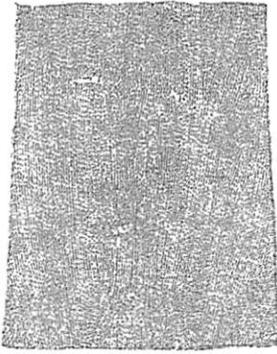
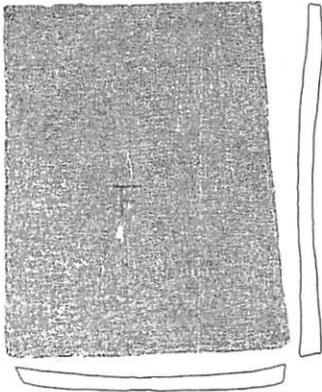
第5図 新久窯跡出土遺物



SI1



SI4



SI10

第6図 霞川遺跡出土遺物

軒が確認されている。

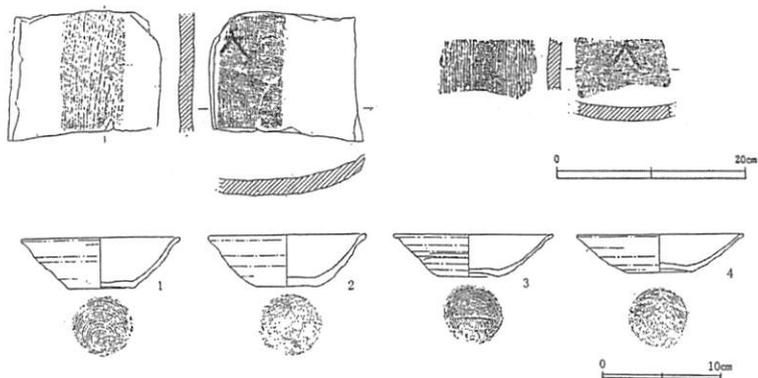
模骨文字瓦は、「逆字」「上」、「中」、「大」、「天」、「十」、「荒」が出土している(第5図)。これら瓦の出土状況は、天井など窯構築材や排水施設構築材である。灰原から瓦類が多数出土していることや、E地点の平地には瓦を集積した遺構が確認されていることから、新久窯で生産され、後の須恵器生産の際に窯構築材として転用されたものであろう。文字の中で逆字「上」は賀美郡、「中」は那珂郡、「大」は大里郡と解釈することもできる(坂詰一九八四ほか)が、「十」や「荒」など他の文字印されることから郡名を表すものではない。八坂前窯では瓦にへら書きの郡名の一字を記し、塔再建時の協力を示した(坂詰二〇一二)が、新久窯生産段階においては、へら書きもしくは模骨文字で文字を記すようになる。ここに造瓦体制の変質が認められ、新久窯跡以降の九世紀後半から一〇世紀にかけての窯業遺跡において、模骨文字瓦は、武蔵国内の瓦生産の性格を示す資料となる。

ここで、九世紀後半以降に操業を開始する窯跡についても触れておく。この中で模骨文字が出土する窯跡は、いずれも九世紀の須恵器供給の中心的存在である南多摩窯跡群御殿山支群、新開遺跡、末野窯跡群桜沢窯跡である。また、地方の小規模な窯跡である高岡窯跡でも出土例が確認できるので、順に述べたい。

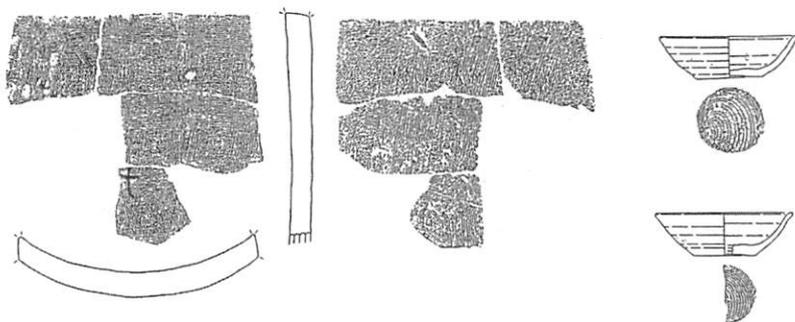
南多摩窯跡群御殿山支群は、創建期の瓦生産窯大丸瓦窯から、さらに西方の多摩丘陵に位置する。ここは相模国と武蔵国の境界に接し、相模国分寺供給瓦窯の瓦尾根窯跡にも隣接する。御殿山支群各窯から「山万」、「大」二種、「正」、逆字「生」、「土」、逆字「上」、「上」、「十」二種、「h」、「工」などの複数の模骨文字が確認されている。瓦の生産が御殿山支群において初めて開始されるのはG三七窯式期で、G二五窯式期の新段階で模骨文字瓦が生産される。その後、G五窯式期になると模骨文字の種類とその生産量も増加する(吉田・蔵持二〇〇一)。さらに、G五窯式期の模骨文字「山万」については、入間市霞川遺跡出土例(第6図)との比較により、東金子窯は南



第7図 新開遺跡出土遺物



第8図 俣埜遺跡出土遺物



第9図 高岡窯跡出土遺物

多摩窯跡群より早い時期で生産を開始した可能性が高く、東金子から南多摩への変遷および工人の移動（吉田・藏持二〇〇一）が指摘されている。また、同じG五窯式期の須恵器生産の増加も注目される。

新開遺跡では、「大」と記号「■」の模骨文字が確認されている（第7図）。新開遺跡は九世紀末から一〇世紀初頭の、須恵器生産を軸として瓦生産も担った窯跡である。「大」については、新開遺跡の工人集落と考えられる俣埜遺跡でも新開窯産の須恵器と同伴するので（第8図）、この新開遺跡で焼成された瓦とみて間違いない。従って、新開窯跡における瓦の生産は、出土状況からも一定量行われていたと捉えたい。

桜沢窯跡は、末野窯跡群に含まれる九世紀後半の窯跡である。出土した模骨文字瓦は、逆字「上」で、字体は新久窯のものよりも小ぶりで退化している。報告では、瓦は須恵器焼成のための焼き台や天井構築材として転用されており（昼間一九九四）、桜沢窯での生産品かは不明であるが、おそらく周辺の窯跡からの搬入品で、末野窯跡群における模骨文字瓦生産を示す例といえよう。

高岡窯跡は、高麗郡内の九世紀第IV四半期に位置づけられる窯跡である。武蔵国分寺に出土例をもつ軒先瓦を生産しており、当該期において注目される生産窯の一つである。粘土紐一枚造りの「干」模骨文字瓦が出土している（第9図）。同文とみられる「干」が国分寺でも出土しており、軒先瓦と共に供給されたものと考えられる。

このように、持骨文字の生産は、四大窯跡に限らず、各郡内の小規模な窯跡においても確認でき、九世紀第IV四半期から一〇世紀初頭にかけて、各窯生産の開始とピークを迎える窯跡の特徴の一つであるといえる。

三 模骨文字瓦生産の背景

九世紀における模骨文字瓦生産の第一の画期は新久窯跡であると述べた。ではその生産には、如何なる背景があつたのであろうか。若干の考察を試みたい。

新久窯の性格については、武蔵国分寺跡の出土状況から七重塔再建が契機となつたとみて異論はない。隣接する八坂前窯の文字瓦は、郡名を示す漢字一字がヘラ書きにより記される。東金子窯跡群出土の瓦に武蔵国の足立、入間、荏原、大里、男衾、埼玉、多磨、橘樹、秩父、豊島の十郡の記銘が認められ、再建時には十郡が参画協力したことが郡名瓦によつて窺うことが出来る（坂詰二〇一二）。軒先瓦をみると、八坂前窯周辺で生産される平城宮系文様の鍍瓦と字瓦を採用しており、再建の背景には国司の協力と先導があつたと考える¹⁾。一方で新久窯においては、郡名瓦もみられるが、八坂前窯より後出する単弁六葉蓮華文鍍瓦（国分寺二七二八型式）、渦巻状および重弧状文様の字瓦（国分寺二三三三・二三三三・二三三三型式）の採用、さらに模骨文字瓦の出現など、八坂前よりも新しい様相を示す。須恵器の様相から、この二窯の時期差は殆ど無い。平城宮系瓦は武蔵国府では出土せず、国府や勝呂廃寺で二三四型式字瓦が出土していることから、前述した変化の画期は、七重塔再建とそれに伴う国分寺大改修事業は終息を向かえ、これより先、武蔵国府と各郡の寺院の整備に移つたことを示しているのではなからうか。そしてこのような情勢のなかで、瓦の需要減少に伴い、郡参画型の造瓦体制は解体されたのであろう。

模骨文字の分布状況をみると、「大」は新久、南多磨、新開、逆字「上」は新久と御殿山支群、桜沢、「山万」は東金子と御殿山支群など、窯跡間で共通している文字があることに気付く。さらに、須恵器編年に従えば、新久窯

以降の九世紀第IV四半期に分布の中心がある。模骨文字の正確については、南多摩窯跡群の報告のなかで次のように指摘されている。南多摩窯跡群の逆字「上」は相模国分寺と武蔵国分寺で確認されており、発注者に対する記号とは考えられない。したがって、模骨文字の付加は生産者側に必要な符号といえよう。生産者側にとって識別要素が必要とすれば、生産管理のためと考えられる。そのようにとらえれば、模骨文字は工人を示す文字・記号と想定することも可能であろう（吉田・藏持二〇〇一）。以上の指摘を受け、九世紀後半における模骨文字生産について考えると、新久窯跡を起点として、その後広がりをみせる模骨文字は工人の移動を示しているものと考えられる。したがって、九世紀第IV四半期という同時期に成形台を異にして存在する同一の模骨文字は、一つの集団からの分派を示しているのではないだろうか。工人は、東金子窯跡群での瓦生産の終了とともに、各々の集団を示す模骨文字をもって、武蔵国内各地へと移動した。その後の生産活動は、九世紀の造瓦技術が須恵器製作の延長である粘土横紐作りであることから、須恵器生産を主たるものとしていたと推測され、その中でも瓦生産を行っていたのである。新久窯跡での瓦生産は武蔵国司の先導が窺われ、この生産体制を示した持骨文字は、武蔵国の公的な造瓦集団としての意味を持っていたものと考えられる。

おわりに

新久窯跡の持骨文字をみると、「荒（荒墓）」、「廣（廣岡）」など豊島郡の郷名を連想させるもの、「上（賀美）」、「中（那賀）」、「大（大里）」の武蔵国北部の地域を連想させるものに気付く。これら郡は、塔再建に参画する郡に含まれている。なぜ、その一字を模骨文字として瓦に示すのか、相模と武蔵の両国への供給の実

態から発注者に対するものでないことは指摘されているが、想像を広げれば、郡名や郷名を工人名や集団名として使用していたとも考えられよう。このように、模骨文字瓦は、新久塞跡の段階で出現し、国分寺や国府、寺院へと供給されていることがわかった。しかし、生産は塔再建時と、その後にはピークがある。後者は御殿前支群の様相から武蔵国、相模国への供給を目的とする一方で、小規模な窯においても生産と寺院への供給が認められ、武蔵国全体に瓦の需要増加があったことを示している。その要因は、元慶二年（八七八）の地震に求められるのではないだろうか。この点については、別稿に譲ることとしたい。

註

- (1) 埼玉県美里町に所在する大仏庵寺においても「中」模骨文字瓦が報告されているが、近隣から資料を所蔵する松久小学校に寄贈されたため、出土地不明のため、記載しなかった。なお、この瓦を実見したところ、凸面縄目叩き調整の粘土横紐一枚作りで、武蔵国分寺資料と共通点が認められた。胎土は東金子のような緻砂質であり、大仏庵寺で出土する瓦とは異なる様相を呈す。
- (2) 有吉重蔵氏ご教示による。
- (3) 鋸齒文縁複弁八葉蓮華文鏡瓦が「埼玉県史」や「埼玉県古代寺院跡調査報告書」において報告されているが、情報が乏しく、所在も不明のため、今回は記載しなかった。なお、稲村坦元もこの瓦の拓本を八坂前窯生産品の字瓦二点と共に「高萩村女影」として報告している。
- (4) 承和十二年の武蔵国司に丹埤真人門成という人物がいる。承和十二年三月の武蔵国分寺七層塔再建申請から三か月後の同年六月癸未条に「(前略) 此日。從五位下丹埤真人門成爲武蔵權守。」とあり、翌年の承和十三年二月壬午条に「(前略) 從五位上丹埤真人門成爲武蔵守。(後略)」とある。「日本文徳天皇実録」卷五仁寿三年三月壬子条に、「(前略) 十二年爲宮内大輔。後還爲武蔵守。所部曠遠。盜賊充阡。門成下車。未幾。風俗肅清。奸猾斂手。嘉祥三年爲大和守。(後略)」とされ、武蔵国に国守と

して赴任する以前の武蔵国内は「盜賊充斥」で社会が混乱した状態であったが、門成が赴任してすぐに「風俗肅清」し、「奸猾欲手」したという。その後大和国守においてもその手腕を発揮し評価されている。このように混乱した武蔵国を短期間で治めたという丹墀真人門成の存在は無視することができない。東金子で半数以上の郡名瓦が確認されていること、武蔵国分寺に限らず国衙でも補修が認められるのは丹墀真人門成の先導の結果ではないだろうか。

(5)「廣」については、新久窯跡平行期の谷久保窯跡から「廣」と底面に記す須恵器が数点出土している。従って、瓦生産と須恵器生産が同一の工人集団のなかにあった可能性が高い。

付記

本稿を草するにあたり、日頃より御指導を仰いでいる須田勉先生をはじめ、高橋一夫、有吉重蔵、昼間孝志、河野一也氏よりご教示を賜りました。深く感謝致します。

引用・参考文献

- 有吉重蔵「武蔵国分寺遺跡発掘調査報告Ⅴ」武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会 一九八一
 有吉重蔵「武蔵国分寺・武蔵国府」「文字瓦と考古学」国士館大学実行委員会 二〇〇〇
 有吉重蔵・中道誠「武蔵国分寺」「国分寺の創建 組織・技術編」吉川弘文館 二〇一三
 大川 清「武蔵国分寺古瓦埵文字考」小宮山書店 一九五八
 鹿島英明「霞川遺跡」入間市霞川遺跡調査会入間市教育委員会 一九八八
 加藤恭朗ほか「勝呂廃寺」坂戸市遺跡発掘踏査団 一九八九
 坂詰秀一「埼玉県入間郡東金子窯跡群の研究」「台地研究」一五号 台地研究会 一九六四
 坂詰秀一編「武蔵新久窯跡」雄山閣出版 一九八二
 坂詰秀一編「武蔵八坂前窯跡」雄山閣出版 一九八四
 坂詰秀一「元慶二年の地震と武蔵国分寺」「武蔵野」第八七巻一卷 武蔵野文化協会 二〇二二

- 園村維敏「第三節 瓦・埴」〔武蔵国府関連遺跡調査報告書Ⅳ〕府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 一九八一
- 古代の入間を考える会 〔古代入間の土器と遺跡(Ⅱ)―須恵器坏の編年(九・一〇世紀)―〕二〇二二
- 古代の入間を考える会 〔南比企窯と東金子窯(Ⅰ)―八世紀の東金子窯の編年と土器の分布―〕二〇二四
- 古代の入間を考える会 〔南比企窯と東金子窯(Ⅱ)―東金子窯の開窯と九世紀の編年―〕二〇二五
- 中平 薫「若宮―第三次発掘調査概報―」日高町教育委員会 一九八三
- 昼間孝志「大里郡寄居町 桜沢窯跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団 一九九四
- 昼間孝志「高岡窯跡」〔日高市史〕日高市 一九九七
- 昼間孝志「勝呂廃寺を再考する(上)」〔論叢 古代武蔵國入間郡家Ⅱ―多角的視点からの考察―〕古代の入間を考える会 二〇〇九
- 松本富雄他「新開遺跡Ⅰ」三芳町教育委員会 一九八一
- 松本富雄他「新開遺跡Ⅱ」三芳町教育委員会 一九八二
- 宮 昌之「坂戸市勝呂廃寺」〔埼玉県古代寺院跡調査報告書〕埼玉県県民部県史編さん室 一九八二
- 吉田美弥子・藏持俊輔「五 瓦の諸問題(二) 模骨文字について」〔南多摩窯跡群Ⅳ〕八王子市南部地区遺跡調査会 二〇〇一
- 渡辺 一他「鳩山窯跡群Ⅱ窯跡編(2)」鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会 一九九〇
- 渡辺 一「竹の城・石田・皿沼下遺跡」鳩山町教育委員会 一九九五
- 日本考古学協会編「武蔵国分寺跡遺物整理報告書Ⅰ昭和三十一年・三十三年度」日本考古学協会 一九八四
- 滝口 宏編「武蔵国分寺跡調査報告Ⅰ昭和三十一年・三十四年度」国分寺市教育委員会 一九八七
- 埼玉県「新編埼玉県史」資料編三 古代一 奈良・平安時代 一九八四
- 日高市史編纂委員会・日高市教育委員会「日高市史」日高市 一九九七